

論 説

老 年 期 と 社 会 (1)

—老年期・人間の本質・共同体—

上 瀧 真 生

21世紀に向けて、わが国は今まで人類が体験したことのない高齢化社会を迎えるといわれている。高齢者にたいして社会はどのように対応してきたのか、そして今後どう対応すべきか、という問題は、社会政策や社会保障制度に関する社会科学の領域だけでなく、心理学や社会史、あるいは文化人類学や民族学などの研究領域でも関心を呼んでいる。

こうした関心は、一面では、人口高齢化を背景に、1970年代末から1980年代はじめにかけて、多くの資本主義国家の政府や社会政策の研究者の一部によって「福祉国家の危機」が叫ばれ、「福祉社会」の構想が提起されたことにも起因している。「福祉社会」の構想では、家族や地域社会が老年者を支える重要なシステムとされていた。そこから、こうした家族や地域社会と老年者とのかかわりが人間の心理において、あるいは歴史において、どのようなものなのかという関心が引き起こされたのである。

そして今日、さまざまな分野で、老年者と社会についての研究成果があげられている。私たちは、マルクスとエンゲルスによって創始された社会科学の基本的な見地に立ちながら、これらの成果を摂取し、老年者と社会とのかかわりあいについて考えることができるようになってきている。本稿は、こうした考察の手始めとして、マルクスやエンゲルスが探究した人間の本質と共同体という見地から、老年者の共同体における位置と役割、およびその最初の発現である原始共同体社会における老年者と社会とのかかわりあいについて考察することを課題としている。

I 人間の本質と共同体

マルクスは、その研究の初期の段階で、人間の本質を次のように分析している。

「・・・[人間の—引用者] 生産的生活は類生活である。それは生活を産み出す生活である。生活活動の仕方のうちに一つの種の全性格、その類性格があるのであって、そして自由な意識的な活動は人間の類性格である。・・・人間は彼の生活活動そのものを彼の意志および彼の意識の対象たらしめる。彼は意識的な生活活動をもっている。・・・意識的な生活活動は人間を直接には動物的生活活動から区別する。まさにこのことによつてのみ人間は一つの類存在なのである。換言すれば、彼がたんに一つの意識的な存在者であるにすぎないのは、つまり彼自身の生活が彼にとって対象であるにすぎないのは、つまり彼が一つの類存在であるからこそである。ただこのゆえにのみ彼の活動は自由な活動である。・・・何らかの**対象的世界**の**実践的産出**、**非有機的自然の加工**は、人間が一つの意識的な類存在であること、つまり類にたいしては彼自身の本質にたいするやうな、あるいは自己にたいしては類存在にたいするやうな対し方をする存在者であること、の証しである。」(傍点は原文。以下、同じ。)⁽¹⁾

「生産そのものの内部での人間の活動の交換も、人間の生産物の交換も、いづれも**類的活動**と**類的精神**に等しい。そしてこの**類的活動**と**類的精神**の、**現実的で意識的な真の定在**が、**社会的な活動**と**社会的な享受**である。人間の本質は、人間が**真に共同的な本質**であることにあるのだから、人間は彼らの**本質の發揮**によつて**人間的な共同体**を、すなわち、個々の個人に対立する**抽象的・普遍的な力**ではけつてなく、それ自体それぞれの個人の本質であり、彼自身の**活動**、彼自身の**生活**、彼自身の**精神**、彼自身の**富**であるやうな、**社会的な組織**を創造し、産出する。」⁽²⁾

ここでマルクスは、二つの側面を分析している。一つは、人間の意識性である。生産ないし労働は、人間に固有の自然への働きかけであり、その意識性という点で他の動物の自然への働きかけと区別される。この意識性は、は

はじめは人間と自然との関係における人間の本質として規定される。もう一つは、人間の共同性である。それは、人間はその存在の最初から、他の人間との相互依存関係なしには存在しえないということである。この共同性は、はじめは人間と人間との関係における人間の本質として規定される⁽³⁾。

これら二つの側面は、生産ないし労働というモメントによって相互に媒介され、相互に前提しあう人間の本質の二側面である。一方で、人間の意識性を高めるためには、生産の発展が必要であるが、人間が生産をおこなうためには、かならず他の人間と協力しなければならない。人間は、個としては弱い生物であり、自然に立ち向かう場合に他の人間と共同することによってしか、生きることができないように創られた生物である。さらに人間の共同性の発揮であるコミュニケーションの発展が、自然に対する認識を深め、人間の自然への働きかけをより意識的なものにする。この見地からみれば、人間の意識性は、人間の共同性を前提にする。

他方、人間がその共同性を発展させるためには、生産を発展させることが必要であり、したがって人間の意識性を発展させることが必要である。生産における共同の必要性が諸個人を結びつけ、生産力の発展がより多くの人間を結びつけることを可能にする。さらには生産において獲得された意識性の発展が人間の共同性におけるコミュニケーションの質を高める。この見地からみれば、人間の共同性は、人間の意識性を前提にする。

こうした二つの側面からなる人間の本質は、マルクスやエンゲルスが生涯にわたって探求したテーマとの関連でとらえられる。すなわち「共同体(Gemeinwesen)」の探求というテーマである⁽⁴⁾。最初、彼らは、彼らの眼前にある資本主義社会の批判的分析から、この人間の本質を「疎外された労働」と「疎外された共同体(Gemeinwesen)」という範疇の下に抽出した。そこでは、資本主義社会が「疎外された共同体」として把握され、それが本来の「共同体」と対比されていた。すなわち、人間の本質とその疎外という見地からの資本主義分析である。

彼らはその後、資本主義社会の経済的分析を深化させ、それとの対比のための前資本主義社会についての研究をすすめる。この中で、「疎外された労働」

と「疎外された共同体」の範疇がより深く、より豊かに分析される。すなわち彼らは、前資本主義社会を「共同体のみせかけをぬぎすていない私的所有」として把握し、資本主義社会を「純粋な私的所有」、すなわち共同体を廃棄した社会として把握する。しかし、そこではまだ本来の「共同体」の姿はあいまいなままであった。

モルガンの『古代社会』をはじめとする原始社会研究を摂取することによって、ついに彼らは、人類史の最初の段階に現われた原始共同体社会（氏族社会）の姿を明らかにした。それは、エンゲルスによれば「兵士も憲兵も警察官もなく、貴族も国王も総督も知事も裁判官もなく、監獄もなく、訴訟もなく、それでいて万事がきちんとはこぶ」「驚くべき制度」であった⁽⁵⁾。民主的で平等な、人間の本質を体現した共同体である。

しかしそれは、不完全な共同体であり、エンゲルスによれば「没落する運命」をもった共同体であった。すなわち、原始共同体社会においては、人間の共同性は部族の範囲内でしか発揮されなかった。部族間では、残忍な戦争がたたかわれた。こうした状態は、共同性を発展させることによって克服しなければならないものであった。ところが、ここでより根本的な問題に突き当たる。それは、原始共同体社会における人間の共同性の発揮が「未発達な生産」によって余儀なくされたものだということである。「自然によって、人間がほとんど完全に支配されている状態」において、「部族は、人間にとって、・・・自分自身にたいする限界」、「神聖でおかすべからざるもの」、「自然によってあたえられた、より高い力」であり、「個々人は・・・この力に従属したままであった」⁽⁶⁾。

このことを、先に述べた人間の本質の二つの側面の相互連関に照らしていえば、次のようになろう。原始共同体社会における人間の共同性は、人間による意識的な自然の支配によって発展させられたものではなく、逆に自然による人間の支配によって押しつけられたものとして存在した。すなわち、人間の共同性は、自然によって与えられた直接的な前提としてのみ存在し、もうひとつの人間の本質である人間の意識性の発達によって媒介され、発展させられたものではなかったのである。そして、人間は自らの本質をより十全

に発展させるために新しい生産力の発展を必要とした。そしてそのためには、新しい生産力に照応する新しい生産関係、階級的生産関係に入らなければならなかったのである。

ところで、なぜマルクスとエンゲルスは、人間の本質とそれが発現する共同体 (Gemeinwesen) の問題を、このように生涯のテーマとして探求しつづけたのだろうか。それは、原始共同体社会→階級社会→新しい共同体社会という彼らの人類史的な展望が、一面では人間の本質が自らを十全に発現させる社会を求める過程として把握されていた⁽⁷⁾からである。もちろん現実的には、この過程は、生産力の発展とそれに照応する生産関係の変化、および階級社会においては生産関係内部における階級的利害対立と闘争という形態をとることによってのみ現われる。彼らはこのことを『共産党宣言』や『経済学批判』の序言等において史的唯物論の諸定式として示している。そこで問題は史的唯物論の諸定式と人間の本質からの歴史把握との関連である⁽⁸⁾。

原始共同体社会と人間の本質との関係については先に述べたので、ここでは階級社会における人間の本質と階級闘争との関連について考えてみよう。階級社会においては、支配階級の私的な利害によって、人間の本質が傷つけられる。生産は支配階級のためのものとなり、生産の成果は支配階級が優先的に享受し、被支配階級はその段階の生産力に照応した生存のためのぎりぎりの水準を与えられるだけである。人間の共同性の発現である、平等で民主的な社会は失われる。精神的労働は支配階級に集中し、被支配階級は肉体的労働にしばりつけられる。ここでは人間の意識性の創造的な部分は支配階級が独占し、被支配階級の意識性は支配階級が生産したイデオロギーを受容することに限定しようとする傾向が生まれる。支配階級の支配のために、被支配階級内部に残された共同性をも被支配階級の階層的分化をてこととして分断していこうとする傾向さえも生まれる。

しかし、人間の本質としての意識性や共同性がまったく失われてしまうかといえばそうではありえない。生産力の発展は、生産の中で発揮される人間の意識性と共同性の発展を前提にしてしかありえない。支配階級の利益が生産力の発展に依存しており、しかもその生産が被支配階級によって担われて

いる以上、支配階級は被支配階級の意識性と共同性をすっかり奪ってしまうわけにはいかないし、また、そういうことはできない。だからこそ人間の本質なのである。

こうして被支配階級は、侵害され傷つけられた形態ではあっても、一定の意識性と共同性を保持する。彼らは、自らを反省することによって、自らの人間としての本質が侵害されていることを意識し、その本質の発展を希求する。そして、自らが身につけている意識性によってこの欲求の充足を阻害している支配階級の階級支配を認識し、自らが身につけている共同性に依拠して被支配階級の間にも階級としての連帯意識を広め、支配階級に抵抗し、その支配を打ち破ろうとする。ここに歴史発展の原動力としての階級闘争が生まれる。つまり、人間の本質は、階級闘争において現われる被支配階級の要求の根拠であり、被支配階級の闘争力の根拠でもある。これが階級社会における人間の本質と階級闘争との一般的な関係である。

こうした一般的な関係は、階級社会の形態によって異なる形態で現れる。ここでは、一定の地縁的・血縁的共同体的関係が基本的生産関係の一契機をなしている前資本主義社会とそれらを破壊してゆく資本主義社会とを対比させて考えてみよう。前者では、被支配階級は共同体的関係をそのまま階級的抵抗と闘争の根拠とすることができる。しかし後者においては、こうした共同体的関係は破壊され、共同性は直接的には資本が担うことになるので、被支配階級である労働者階級は依拠する共同的关系を既存のものとしてはもちえない⁹⁾。もちろん、破壊しつくされる前の地縁的・血縁的共同体的関係に依拠しうる場合がまったくないわけではない。しかし、その共同体的関係の範囲は狭く、その力は弱いので、全般的な階級闘争においてはより広い階級的な連帯のなかに組み込まれていかなければ無力である。そこで労働者階級は、自らの階級的利害を意識的に、科学によって理解し、それを階級内に広げていくことをつうじて階級の共同性を新しく発展させることによって、はじめて自らの抵抗と闘争の拠点をつくることができる。つまり、資本主義社会における被支配階級の闘争には、より高い意識性とそのうえでのより質的に高い共同性が必要とされるのである。

【註】

- (1) マルクス『1844年の経済学・哲学手稿』『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店（以下、『全集』と略す），第40巻，436～7ページ。
- (2) マルクス『ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』（J. T. パリゾ訳，パリ，1823年）からの抜粋』『全集』第40巻，369ページ。
- (3) 人間の本質については，鈴木茂論文集刊行会編『鈴木茂論文集1 理性と人間』文理閣，1989年，IおよびIIに所収の諸論文，とくに「マルクスにおける人間と歴史」を参照。また，尾関周二『言語と人間』大月書店，1983年，同『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店，1989年，も参照。
- (4) マルクスとエンゲルスによる「共同体 (Gemeinwesen)」の探求の過程については，布村一夫『マルクスと共同体』世界書院，1989年，に多くを学んだ。以下の記述は，基本的にこれに依拠している。
- (5) エンゲルス『家族，私有財産，および国家の起源』『全集』第21巻，99ページ。
- (6) 同上書，100ページ。
- (7) 前出「マルクスにおける人間と歴史」
- (8) 上野俊樹「アルチュセールの認識論とイデオロギー論(3)』『科学と思想』第76号，1990年4月，288～9ページ参照。
- (9) 近年の日本史における家族研究においては，中世・近世の社会におけるイエ・家を，近代における国家の支配の手段としての「家」制度と区別して，上級領主権力に対する被支配階級の抵抗の拠点としての面をもつものとして把握している。これらの研究も，ここで提起している人間の本質と階級闘争との関係という問題のなかに位置づけることができると考える。関口裕子，鈴木国弘，大藤修，吉見周子，鎌田とし子『日本家族史』梓出版社，1989年，の「はしがき」参照。

II 老年期の役割

以上，意識性と共同性という二つの側面をもつ人間の本質が，生産力と生産関係との矛盾，および階級社会においては生産関係内部での階級的対立と矛盾によって媒介されながら，自らの十全な発現を求めて人類史発展の根拠となることを考察してきた。この見地をふまえて，以下では人間の本質の発現としての老年期の役割と位置を考えてみたい。

その際，生涯発達心理学の成果を手がかりとする。今世紀後半，発達心理

学は、乳幼児・児童・青年を研究対象として、人間の有能さを明らかにしてきた。近年、それは中高年者を研究対象としてその人間観を発展させ、人間のライフサイクルの全体を見通すことができるようになってきている⁽¹⁾。

高橋恵子と波多野誼余夫の両氏は、生涯発達心理学の成果にもとづいて、老年期において人間の知的能力は衰えるという常識的な理解に反対する。そして、老年期における人間の知的有能さの二つの側面を明らかにしている。ひとつは、ある分野における「エキスパート」になることによってもたらされる有能さである。そしてもうひとつは、より一般的な人生における問題解決能力、すなわち「知恵」をもつということである。

彼らによれば、人間の知的有能さは一般的な問題解決能力や推論能力だけからは説明できず、その人間がもつ知識に依存する面をもっている。この知識は、世界全体ないしは扱われる対象についてのイメージ（概念的知識、メンタルモデル）、事実に関する知識、それを扱うための手続きに関する知識などから構成される。その中心となるのは、メンタルモデルである。人間は外界の諸現象を自己の思考の中に反映するが、その際、まったく白紙の状態外界に向かうわけではない。人間は、外界の現象を一定の構造をもって整理して反映するための自己の内部に作り上げた認識の枠組みをもっているのである。メンタルモデルとは、この認識の枠組みであると理解してよいであろう。こうした枠組みが外界の構造を正確に反映していればいるほど、新しい事実や状況が現われても、この枠組みに依拠しながら、すばやく認識し、対応することができる。また、その認識の枠組みにもとづいて、他人や自分の実践の達成度をよりよく評価することができる。

認識の枠組みは、乳幼児の段階では生得的な制約に多分に依存しているが、その後の人間の発達においては、彼がさまざまな経験と学習をつうじて獲得した事実に関する知識や手続きに関する知識によって、より豊かなものにされる。つまり自らの実践をつうじて、実践にたいする対象の応答を知り、そのパターンのいくつかをまとめて認識の枠組みに仕上げていくのである。これが「熟達化」である。経験と学習の積みかさねには時間が必要であるから、人間は加齢に伴ってより熟達化していくという側面をもっている。老年期の

人間は、豊かな認識の枠組みをもつことができるのである。

実際、加齢にともなう知能の変化についての研究によると、図形弁別や図形構成などによって測定される「流動性知能」は老齢化によって低下するが、語彙や社会的知識によって代表される「結晶性知能」は老齢化によっても低下せず、かえって上昇するという。後者の知能は、認識の枠組みの基礎をなすものと考えられる。

ところで個としての人間は、すべての領域でその能力を発達させることができるわけではない。ある特定の個人は、自らの人生における生産的な仕事のある特定の領域に限定しなければならない。こうして特定された領域で、それぞれの人間は認識の枠組みを発展させ、その領域での非常に高い問題解決能力や技能を獲得する。これが、「エキスパート」としての有能さである。人間がエキスパートとなるのは、多くの領域で中年期から老年期にかけてである。老年期の人間こそがエキスパートになるということは、それ自体が老齢化によって知的能力は一方向的に衰退するという常識的な理解に反して、老年者が全面的ではなくともある特定の領域で有能でありうることを示している。しかしそれだけでなく、高齢者は自ら得意とする分野をもつことによって、不得意な分野を補うというやり方で知的に有能でありつづけるという。

さらに、より一般的に人生経験という点においても、人間は加齢にともなって熟達化すると考えられる。これらの経験を積みかさねるのには長い年月が必要であるから、この領域での認識の枠組みの豊富化にも長い年月が必要である。だから老年者こそが、この領域でのもっとも豊かで正確な認識の枠組みをもつ人間となりうる。これに依拠して、彼らは人生における問題解決という領域でのエキスパートになる。これが老年者の「知恵」といわれるものであるという⁽²⁾。

老年期における人間のこのような知的な有能さは、人間の本質とどのようにかかわっているのだろうか。まず、エキスパートになるという面について考えてみよう。それは、さしあたっては人間の意識性の発達の個人のレベルでの発現である。諸個人がエキスパートになる領域は、分業の発達した今日ではさまざまなものが考えられる。しかし、人間は生産をつうじてしか生活

できない存在なのだから、その第一義的なものは生産にかかわる領域である。人は、自らの意識的な生産という実践の経験をつうじて、自らが対象とする自然の姿についての認識の枠組みをより豊かなものにしていく。そして老年期において、その対象とする領域での自然についての認識の枠組みをもっとも発展させる。人はこの認識の枠組みに依拠して、ものを考え、その思考の結果を実践にうつすのであるから、老年者はある領域についてのもっとも意識的な実践者、生産者となる。これがエキスパートになるということであろう。

老年者のもう一つの有能さである「知恵」についてはどうであろうか。高橋、波多野の両氏は「知恵」を人生の問題解決という領域における有能さであると規定しているが、この人生の問題解決という領域は、人間の共同性にかかわる領域だと考えられる。人生における問題というと、なにか非常に個人的なものであるように思われるが、実際にはそうではない。人生において突き当たる大きな問題を思い浮かべてみれば、親子の問題、友人・仲間の問題、恋愛や結婚の問題、思想・信条の選択の問題、職業の選択の問題など、ある個人が他の個人とどのような関係を結ぶか、あるいはある個人が社会とどのようにかかわるか、といった問題であることがわかる。すなわちそれは、ある個人が、人間の本質としての共同性を、ある特定された人間関係や社会のなかで、どのように発揮するかという点にかかわる問題なのである。

人生において、さまざまな体験をするということ、あるいは他の人のさまざまな体験をみるということは、さまざまなタイプの個人とその個人がかかわりあうさまざまなタイプの人間関係、さらにはその人間関係の総体としての社会についての認識の枠組みを豊かに発展させることになる。だから、老年者の「知恵」とよばれるものは、その個人が獲得した人間の共同性についての認識の枠組みに依拠しているといえる。もう少し分析的に言えば、人間の共同性の発現のさまざまな個人差とそのタイプについての認識の枠組み、およびこれも人間の共同性の発現であるさまざまな人間関係、その総体としての社会についての認識の枠組みを豊かで正確なものとしてもつことに依存している。つまり「知恵」とは、人間の共同性を媒介する人間の意識性の発

達なのである。

このように考えれば、「知恵」は、諸個人の人生におこる問題の解決能力としてだけでなく、社会におこる問題の解決能力としても考えることができる。とくに個人の人生の問題から間接的に社会について考えるだけでなく、実際に直接に社会の諸問題の処理に長く携わっている場合には、より一層、こうした問題の解決における有能さを獲得しやすいであろう。平等で民主的な共同体では、共同体構成員が直接に社会の問題解決に携わるので、老年者が社会運営の問題での豊かな「知恵」をもつことができる。

これらの生産や社会における認識の枠組みは、実際には、個人がゼロから出発して獲得するものではなく、口承によるしろ、文字によるしろ、「きまり」や「しきたり」や「掟」や「教訓」や「理論」として社会的になんらかの形で定式化されているのがふつうであろう。しかしその場合にも、これらのものをたんに覚えるだけでは有能にはなれない。個人の生産と社会における意識的な実践は、これらのものを自らの実践にてらして反省し、自分の使いやすい形に整理し、さらにはより正確なものに発展させる機会となる。こうした実践をくりかえすことによって、老年者は「きまり」や「しきたり」や「掟」や「教訓」や「理論」を豊かな「生きた知識」として獲得する。比喩的にいえば、これらを血肉化し、体現した個人となるのである。

老年者の有能さは、人間の共同性の発現の中で発揮される。これも高橋、波多野の両氏が明らかにしていることだが、「熟達化」はけっして個人的な過程ではない。「熟達化」には、かならず仲間の支えが必要とされる。人間の実践においては、一人だけで対象に働きかけるということは稀である。すでにその対象についての知識をもっている仲間がいて、その仲間に助けられて経験をつむ中で初心者もほかに熟達していく。しかもこの個人の熟達化を支える仲間の中にも熟達の程度のちがう諸個人がいるのがふつうであるという⁽³⁾。

こうした階層性をもった集団の中におかれることで、老年者はその有能さを発揮することができるのである。老年者は、自らの身体的な限界が許すかぎり、集団の中心にすわって自らの有能さを発揮し、後進の人びとを教育し、

導くことができる。しかし、老齡化によって身体的な能力が低下し、やがては集団の中心にすわることができなくなることも生じる。しかしそうなったとしても、彼らは自らの有能さを発揮することができる。つまり、自らが獲得した認識の枠組みを後進の人びとに伝承することがその役割となるのである。

こうした役割は、自らが獲得した認識の枠組みを「きまり」や「しきたり」や「掟」や「教訓」や「理論」として後進の人びとに直接に教え込むことによっても果たされる。しかし、熟達化が個人の実践による経験の積みかさねを必要とすることを考えると、その役割を果たすうえでより有効なのは老年者が有能な評価者として機能することであろう。老年者は、熟達によって獲得した評価の能力を使って、後進の人びとの実践を正しく評価し、間接的に自らの認識の枠組みを伝えるのである。それは老年者のアドバイザーとしての役割につながるものである。

老年者の伝承者、評価者、アドバイザーとしての役割は、エリクソンらが老年期における生殖性の形態としてあげた「祖父母性」⁽⁴⁾を特徴とする。人間は、祖父母になることによって、子どもを育てるという意味での生殖性の二度目の経験をする。祖父母は、ときには自らの手で孫を育てることもある。しかし、子どもを育てる直接的な責任をもつ親が別にいるのがふつうである。祖父母が孫を世話するのは、親を補佐し、援助するためである。祖父母は親にこうした援助を与えるとともに、自らの経験をもとに助言を行う。「祖父母性」は、子どもの養育についての直接的な責任からの解放を一つの本質とする。子どもの養育だけにかぎらず、直接的な責任からの解放は、肉体的能力がしだいに衰えていく際に、老年者がその有能さを発揮する一つの条件であろう。

さらに老年者は、祖父母としての補佐や援助、助言をつうじて、自らの親としての経験を反省し、統合する機会を与えられる、とエリクソンらはいう。このことは他の領域についてもあてはまる。老年者たちは、後進の人びとの実践を補佐し、彼らに助言を与え、その成果を評価することをつうじて、自らの有能さを伝えるとともに、それを維持するのである。後進の人びとの実

践が、老年者に自らの認識の枠組みを見なおし、それをより豊かで正確なものにしていく機会を与える。

こうして老年期の有能さは、祖父母的な伝承者、評価者、アドバイザーという役割の中で発揮される。これらの役割こそが、老年期における人間の本質の発現である。賢人、長老、伝統の伝承者、予言者などの老年者についてのイメージを思いうかべてみれば、これらの役割がその中核に存在している。こうしたイメージがひろく存在することは、さまざまな変容や侵害を受けながらも、老年者が歴史的に一貫してこれらの役割を果たしてきたことの一つの傍証であろう。老年期の有能さは、これらの役割のための基礎となる。

〔註〕

- (1) 生涯発達心理学の成果の概要については、高橋恵子、波多野誼余夫『生涯発達の心理学』岩波新書、1990年、に多くを学んだ。また、主に情動的・社会的側面についてのライフサイクル研究における老年期の研究では、E. H. エリクソン、J. M. エリクソン、H. Q. キヴニック（朝長正徳、朝長梨枝子訳）『老年期』みすず書房、1990年、に学んだ。
- (2) 以上、老年期の有能さの二側面については、前出『生涯発達の心理学』第1章、第3章、および第7章を参照。
- (3) 以上、人間の熟達化における集団や仲間の役割については、同上書、27～29ページ参照。
- (4) 以下、老年期の「祖父母性」については、前出『老年期』78～110ページ参照。

III 老年期と共同体

以上でみたとおり、老年期の個人において、人間の本質は祖父母的な伝承者、評価者、アドバイザーの役割を果たすことによって発現する。その場合、この老年期の役割とそこでの有能さは、集団の中にくみこまれてはじめて、有効に発揮されるものであった。このことを、老年者と共同体との関係という見地からもう一度考えてみよう。

さきに述べたように、さまざまな領域における熟達化は、個人によってのみ達成されるものではなく、熟達の程度の異なる人びとの共働のなかでしだ

いに達成されるものであった。共同体は老年者の役割を發揮する場であると同時に、共同体の若い成員の熟達化の場でもある。老年者の熟達が若い成員の熟達化を助けるのである。このことは、たんに生産の場だけではなく、社会生活、人間関係の場においてもそうである。だから、直接的な生産の場から引退しなければならない場合でも、なお老年者は自らの有能さを發揮してその役割を果たすことができ、共同体の若い成員は彼らに学ぶのである。

若年者は、老年者が長い生産と社会生活における実践の経験をつうじて獲得した認識の枠組みを前提にする。彼らは、老年者の教えをうけて自ら実践し、その実践を老年者に評価してもらうことによって、自らの認識の枠組みを豊かにし、正確なものにしていく。そしてやがては、老年者の認識の枠組みより、より豊かでより正確な認識の枠組みを發展させる。この側面からすれば、共同体とその成員にとって、老年者がその有能さを發揮すること、祖父母的な伝承者、評価者、アドバイザーという役割を果たすことは、自らの意識性と共同性との維持と發展に不可欠なことである。

他面、老年者の役割が十分に果たされるには、いくつかの条件が必要である。高橋、波多野の両氏は、老年者の有能さが維持される三つの条件をあげている⁽¹⁾。一つは何らかのエキスパートであること、第二は健康であること、第三は社会的サポートだという。ここでは第二、第三の条件と共同体とのかわりを考えてみよう。

老年者が加齢によって身体的機能が衰え、直接的な生産の場で十分に活動ができなくなるときがくる。そのなかで老年者が健康を維持するためには、なんらかの形で共同体の生産物の分配にあずかる必要がある。さらに日常的な生活をおこなうためにも、他人の援助が必要とされることもある。そのときには、共同体の他の成員の援助が必要とされる。この援助を受けて日常的な生活を続けることが、健康を維持するうえでも必要である。身体的な機能は、使われなくなれば、急速に衰えるものだからである。

共同体が老年者に生産物を分配し、また援助を提供するのは、共同体にとって老年者の有能さが必要なものだからである。共同体と老年者との関係は、けっして一方的な扶養・被扶養の関係ではなく、相互的な支えあいの関係な

のである。

相互的な支えあいとの関係は、老年者の有能さを維持するうえで、身体的機能の面で有益だけでなく、情動的な面でも有益である。必要とされているという感覚は、自己の役割の感覚を強化し、自分の役割を果たすための意欲を強める。老年者とその子どもたちのさまざまな助力の交流を分析したエリクソンらによれば、老年者は子どもたちから受けとる助力を「自分たちが愛され心にとめられているしるし」だと考え、子どもたちを「助けてやれるのが喜び」であり、「自分たちの援助が相手に歓迎されるようなよい家族関係でいられるということは、もっとうれしいことである」という。「この素直な満足感は、・・・老いた親の側には祖父母的生殖性の感覚を強化するのに役立つ」のである⁽²⁾。

また後進の世代の熟達化は、老年者にとっては自己の獲得した熟達の程度を再度確認する機会であり、後進の世代の達成は自分自身の達成と感じられる。この達成感、満足感は、死に向かう不安に立ち向かうことを可能にする。エリクソンらは、老年者と孫たちとの関係を分析して次のようにいう。

「研究対象者たちがライフサイクルの終わりに近づくにつれて、多くの人が、彼らの孫たちを無限の未来に延びる自分自身の延長と考え始める。・・・このように孫たちの未来に関心を持つことによって、逃れることも知ることができない死をのり越えて、これらの若い人たちの前に見える長い人生へ思いを馳せることが可能になる。そしてこのような孫たちの幸福への個人的な関心は、老年者たちが世界全体としての未来の幸福に抱く関心の一面にすぎない。」⁽³⁾

こうして得られる未来との一体感を抛りどころに、老年者は、死にたいする不安をのりこえて、最後の時期を有能に生きるのである。その有能さの発揮によって、共同体の成員は尊敬と尊重とそれにもとづく助力とを老年者に与えるのである。

エンゲルスは、原始共同体社会における老人について、「共産主義的世帯と氏族は、老人や病人や戦争不具者にたいする自分たちの義務をわきまえている」⁽⁴⁾と述べているが、これはたんに老齢者を共同体が一方的な義務として扶

養するというのではない。以上に述べてきたような共同体成員と高齢者との生き生きとした相互の支えあいによっているのである。

とりわけ、経験的な知識に多くを依存し、それを口承によってしか伝えることができない原始共同体社会では、高齢者の有能さは一面で一層尊重されることになる。民族学、文化人類学の成果に学んだボーヴォワールは、全体としては「若い」を不生産的で悲惨なものとしてとらえている⁽⁵⁾。しかし彼女も、「動物の社会より複雑な人間の未開社会は、^{シアンヌ}知識をさらにいっそう必要とし、それは口承による伝承だけが伝えることができる」のであり、「古老がその記憶力によって知恵の保持者であり、過去の思い出を保ちつづけているならば、彼は尊敬をかちえる」と述べている⁽⁶⁾。このかぎりでは、人類史のはじめに生まれた原始共同体社会でも、高齢者と共同体との支えあいは緊密なものであったろう。

こうした支えあいは、彼女によれば、多くの未開な共同体において、老年者が孫の世代の子どもたちを世話し、子どもたちが老年者を世話する関係として現われている⁽⁷⁾。老年者たちは、直接的な生産から切り離された時間を利用して、子どもたちを世話し、伝承や神話や教訓を語り、ともに遊び、教育する。子どもたちは老年者たちの生活の手助けをしながら、彼らに学んで伝統的な認識の枠組みを獲得する。このことは、共同体の成年期の人びとにとっても助けになる。子どもたちの教育から解放されて生産に専念することができるからである。こうした子どもたちとの関係のなかで、原始共同体社会における老年者たちも、死をのりこえた永続性の感覚をもっただろうと考えられる。

しかし他面で、原始共同体社会は不完全な共同体であり、「没落する運命」にある共同体であった。だから、原始共同体社会における老年者と共同体との関係の発展も、限界をもっている。

なによりも、こうした共同体と老年者との相互的な支えあいの関係は、ごくかぎられた老年者にしか享受されえないものであった。「自然によって、人間がほとんど完全に支配されている状態」⁽⁸⁾においては、共同体の生産力は直接に生産に携わる人口によって規定されている。共同体内部の老年者人口比

率が高まることは、その共同体の生産力の低下と衰退をまねく。だから未開な共同体は、共同体全体については、「青春と結びついた活力と豊穡を称揚し、老年の疲弊と不毛を恐れる」⁽⁹⁾。原始共同体には、多くの老年者を支えるだけの余裕がないのである。

他方、共同体の各成員の側についていえば、厳しい自然との対決のなかでは老年期まで生き残ることが難しいという事情がある。原始共同体社会では、栄養も十分でなく、医療も発達していない。そのなかでは、身体的・精神的能力においてとびぬけた能力を持つ少数の者が、偶然性に左右される淘汰のすえに、ようやく老年期まで生きることができたのである。実際、紀元前のヨーロッパや縄文時代のわが国における平均寿命は約15年であり、65歳以上の老年者人口の割合は約2%、短期的・地域的に高くなったとしても4%程度と推定されている⁽¹⁰⁾。その意味では原始共同体社会における老年者は一種のエリートであり、共同体との支えあいができるのはこのエリートだけなのである。

さらに、原始的な共同体において老年者が獲得する有能さについてみると、それは彼が属する共同体に固有の生産の対象や様式によって直接に規定されている。原始共同体社会は、その自然的な条件によって規定された限定された生産を行うのがふつうであろう。だから共同体成員は、漁撈に従事する共同体では漁撈についての、狩猟に従事する共同体では狩猟についての、農耕に従事する共同体では農耕についての有能さは獲得する。しかし彼らは、それ以外の有能さを獲得できない。さらに漁撈や狩猟や農耕といっても、それが対象とする獲物や作物がちがえば、そこで獲得される有能さはより限定されたものとなる。原始的な共同体は、自らに固有の生産以外の領域で、各成員が能力を発揮する場を与えないのである。

ここでは、個人の個性にみあった領域で熟達化をめざすという選択の機会はない。それだけでなく、共同体に固有の生産に適合的でない個性をもった成員は、老年期まで生き残る機会が乏しいとさえ考えられる。したがって、原始共同体社会での老年者の有能さは、多様な個性を前提にし、それを個人の自発的な意志にもとづいて発展させることによって得られるものではな

い。共同体の生産に直接に規定された熟達化は、人間の意識性という本質の発現としては不完全で一面的なのである。

これらの限界をのりこえて、老年者と共同体の相互的な支えあいの関係を発展させるためにも、やはり生産力を発展させ、意識性を発展させなければならない。この面からも、原始共同体的な生産関係は新しい生産力を発展させる新しい生産関係、階級的生産関係に移行せざるをえなかったのである。

【註】

- (1) 前出『生涯発達心理学』61～62ページ。
- (2) 前出『老年期』96ページ。
- (3) 同上書、70ページ。
- (4) 前出『家族、私有財産および国家の起源』『全集』第21巻、99ページ。
- (5) ボーヴォワール（朝吹三吉訳）『老い』上・下巻、人文書院、1972年。彼女が「老い」にたいして悲観的なのは、ひとつには人間の老年期における有能さについての認識を彼女がまだ得られなかったことによっており、もうひとつには後に述べる生産力的な限界についての認識によっており、さらには資本主義社会における老年者の社会からの疎外の認識によっていると考えられる。
- (6) 同上、上巻、50ページ。
- (7) 同上書、97～98ページ。ここでもボーヴォワールは、老年者と子どもとの関係を不生産的な者どうしの連帯という悲観的な見地からとらえている。
- (8) 前出『家族、私有財産および国家の起源』100ページ。
- (9) 前出『老い』上巻、48ページ。
- (10) 伊藤達也「古代から現代そして将来の老人人口」利谷信義、大藤修、清水浩昭編『老いの比較家族史』三省堂、1990年、23～26ページ。